

# 堀辰雄「姨捨」考

工藤 茂

堀辰雄の「姨捨」は『文藝春秋』昭和十五年七月号に掲載された小説である。堀はこの小説を信濃追分で書いたと思われる。昭和十五年六月八日に追分から堀多恵宛に出したはがきに、へ女の一生を二十枚の短篇にたたきこむのはなかなか容易でない。どうしても十日一ぱいばかりさうだ。メ切に間に合つてくれればいいと思つてゐる」と書いている。このはがきに書かれてはいるように、「姨捨」は三十枚ほどの短い小説であるが、そこに描かれているのはひとりの女性の半生で、そういう意味ではその質的相違を超えて、ふとチエーホフの短篇小説「可愛い女」を想起させるものを持つている。堀辰雄のこの小説について、日本文学を縦に流れる「姨捨」の系譜という観点から考察を加えて見ようというのが、拙稿の目的である。

## 1

堀多恵子の『堀辰雄の周辺』（平成8・角川書店）によると、堀辰雄が折口信夫の講義に顔を出したのは昭和十二年のことだったという。

辰雄が折口信夫先生に初めてあったのは昭和十二年の晩秋、先生の弟子小谷恒さんにつれられて、後期王朝文学史の「宇津保物語・落窪物語」を聴講したのが最初である。辰雄はその頃から古典に目覚め、王朝文学に親しみ始めていた。『かげろふの日記』

を書いたのもこの年である。

彼女はこう述べた後、さらに次のように書いている。

翌年（昭和十四年）私たちは逗子に住んでいた。辰雄は毎週、慶応大学まで折口先生の「源氏物語」の講義を聴きに通つていった。折口先生の王朝文学に対する考えを自分の仕事のために聞き取ったのだらう。又、『死者の書』は辰雄を大和の旅に誘い、古典に深く入りこんでゆくもとなつたようだ。

ここには、当時、堀が日本の古典文学に親しんでゆく契機の一つが述べられている。小谷恒はこのことについて、「堀辰雄と折口信夫」(注①)に、もう少し詳細に述べている。それによると、その頃、堀辰雄の書齋の机上には折口信夫の『古代研究』三冊が座右の書として置いてあったという。堀は小谷に新しい仕事のために折口先生に「宇津保物語」や「落窪物語」の話を知りたいのだがと相談する。そこで小谷が折口先生に伺うと、ちょうど國學院で後期王朝（平安朝）文学史のうちその辺のことを喋っているの、そこへ来られたらどうかということになった。そこで二人で渋谷の大学まで出かけた。へのんきな時代でまるで二人の助手のような格好で教室に入れてもらい、一番後の席に並んで「宇津保物語・落窪物語」という講義を聞いた。堀さんが折口先生に会ったのはこの時が最初である。講義のあとで次の講義が始まるまでの短い時間研究室で話を交えただけで、珍しく学生時代にかえつたように少し興奮している堀さんといつれ立つて街に出た。

と小谷は書いている。

堀が毎週水曜日の午後、慶應で行われていた折口の「源氏物語全講会」に通うことになったのは昭和十四年のことだという。小谷はその頃全講会では宇治十帖の「橋姫」の巻の講義が始まった、と述べている。つづけて彼はへともあれ堀さんは「死者の書」(注②)を読んだあたりから、ますます国文学の世界に深く入り込んで来たことはたしかで、自分も古代の相をほんとうに捉えてみたいと激しい熱望をもって大和の村々をしきりに歩いていって書いています。

堀多恵子と小谷恒の書いたものによると、堀辰雄が日本の古典に接近していくのは、以上のように、折口信夫の感化が大ききように考えられる。一方、このことに関して、それまでとは異なった観点から論じていたのは杉野要吉であった(注③)。彼は在来のへまったく「物語の女」を経て「風立ちぬ」、「かげろふの日記」、さらに「菜穂子」へと展開する「恋する女達の永遠の姿」主題展開上の「内的必然性」としてこれをとらえ、「日本的なるもの」についての論議、「古典復帰への気運」など、この時代下の外的状況とは無縁とする。通説に対して以下のような見解を示す。

堀の昭和十年初頭における「日本的なるもの」への転回姿勢は、たんに初期から持続的に内在した古典的なるものに寄せる関心と憧憬のおのずからなるしずかな開花としてとらえるよりは、その開花には、開花へと堀をみちびく媒体が疑いなく介在したというところ、すなわち、堀が昭和初年代を在来の私小説的伝統に反抗し自己の文学をより西洋的ロマンの文学たらしめんとしたために、おのずと抹殺せざるをえなかった人しれぬ「日本的伝統」への関心と憧憬を、初期日本浪漫派の文学運動、なかならず保田与重郎の投げかけた耽美、唯美的古典論の影響によい触発を受け蘇生させると同時に、それを媒介に、以後「日本的なもの」の世界へあらたな文学的転回、開花をとげていったものとしてとらえ

うるようにおもわれるのである。

引用したのは結論の部分だけなので、この論文の実証性を示すことができないのが残念であるが、これは十分に説得力のある論文である。時代の思潮が大なり小なり当代の文学に投影されていることは、歴史の必然なのだから。時を隔てて振り返ってみると、それがよく見えてくるのは周知のことであろう。杉野はそれを堀自身の書いた適切な資料を数多く引用して実証している。

さて、ここで私の見解を示しておこう。私は、堀辰雄の古典志向への内的必然性に、保田与重郎の古典文学論が色濃い影を落とし、彼を折口信夫のもとに赴かせたと見る。その結果彼は、王朝ものと呼ばれる「かげろふの日記」「ほととぎす」「姨捨」「曠野」といった一群の小説を書くことになるのである。

たとえば、堀は彼の「更級日記」というエッセイ(注④)で「更級日記」は私の少年の日からの愛読書であつた」と言い、おおよそ次のようなこと書いているのだ。

まだ、夢多く、異国の文学にだけ心を奪われていた少年の日、へこの古い押し花のほひのするやうな奥ゆかしい日記の話をしてくれたのは松村みね子(片山広子)だった。その頃の「私」に、古い日本の女の姿を見失わないようにとの思いやりからだっただろう。「私」は聞きわけのよい少年のようにすぐその日からへ当時の私には解し難かつた古代の文字で書綴られた「更級日記」を読み始め、やがてへ古い日本の女の姿へが浮かび上がってくるのを知った。へ日本の女の誰でもが殆ど宿命的にもつてゐる夢の純粹さ、その夢を夢と知つてしかもなほ夢みつ、最初から詮(あきら)めの姿態をとつて人生を受け容れようとする、その生き方の素直さといふものを教へてくれたのである。

そのようにして心の一番奥深くでへ古い日本の女のひとりへに人知れぬ思慕を寄せていたが、そのことは誰にも話しはしなかった。た

だ、一度だけ佐藤春夫の前で言い出したことがあった。それから数年たち、いつかこの日記から気持ち離れ出していた頃、《保田與重郎君がこの日記への愛に就いて語つた熱意のある一文に接し、私は何かその日頃の自分を悔いるやうな心もちにさへなつてそれを感動しながら読んだものだつた》。それ以来、再びこの日記は「私」の心から離れないようになった(傍線工藤)。

堀は右の文章の中で「少年の日」と言っているが、『堀辰雄全集10 堀辰雄案内』(角川書店・昭和40年12月20日)の「年譜」(堀多恵子・小久保実編)によると、堀が初めて松村みね子を知つたのは大正十三年八月、数えて二十一歳の時であった。その時彼は、軽井沢のつるや旅館に芥川を訪ねて彼女に会つた。彼女が「更級日記」の話をしたのは、その時だったのであろうか。それとも、翌年の軽井沢のことであつたのだろうか。翌年のことだとすれば、堀が数えて二十二歳の頃だつたことになる。

さらに、堀が右の文章の後半で言及している保田與重郎の「更級日記」への愛について語つた一文というのは、おそらく保田の「更級日記」のことであらう。このエッセイは『国語・国文』第五卷第八号(昭和十年八月・星野書店発行)に掲載された後、少し訂正加筆されて『コギト』第四十四号(昭和十一年一月)に再掲された。前者は京都帝国大学国文学会の編集する学術雑誌であつたから、堀が読んだのは多分後者の雑誌に掲載されたものであろう。このエッセイには、堀の小説「姨捨」を解く鍵の一つが隠されている。それは次のようなところである。

更級は一人の女性の運命の身上話ではない。一つの典型として本来のかあいさうな人々の物語の一つである。かういふ人間はかうなるといふ報告ではない。かういふ人間の原始からの心情を描いてゐるのだ。変貌もなく信念の更生もない、一つの宿命の詩である。どちらにしても何とも出来ない人たちの一人の身上話とい

ふべきであらう。(略)とまれ孝標の女といふ作者も自讃をかくために哀愁の詩を描かねばならなかつた可憐の文章人であつたことだけは間違ひなからう。(注⑤)(傍線筆者)

この部分はエッセイ「更級日記」の最後の部分である。その傍線部以外にも保田は、この文章の中で「この時代の精神の一典型的な様態が描かれたものである」と繰り返し述べている。

堀はその「古い日本の女のひとり」を、一つの典型として小説に描こうとしたのではなかつたか。次節においてその検討を試みよう。が、その前に彼の使つたテキストについて触れておきたい。

『「姨捨」の創作過程をめぐって—新資料・書き込み本と草稿を中心に』という吉永哲郎の論文が『国語と国文学』第八百三十四号に掲載されたのは平成五年六月のことである。そこで吉永は「堀辰雄が原典をどう読んでいたかの具体的な研究はほとんどない」と断つたうえで、表題の内容について論じている。その中で、堀が「姨捨」執筆にあつた使用したと思われるテキストについて、次のような指摘をしている(注⑥)。

『校註更級日記』関根正直・昭和14・10版。

『英訳更級日記』土井光知・大森安仁子訳・昭和9。

『更級日記』西下経一校訂・昭和11・3版。

それに、玉井幸助の『更級日記錯簡考』を参照して執筆した。

吉永の論文は行き届いた調査の結果書かれたものであるだけに、間違いないものと考えられる。特に『英訳更級日記』の使用は、当時の古典の注釈書の出版状態を考え合わせると、納得させられる。そしていかにも堀らしいと思わせる。なお、吉永の論文の中で、「更級日記」の作者が信濃に下つていたと考えた人物がそれ以前にいたことを、『更級日記錯簡考』に基づいて指摘しているところは、たいそう示唆的であつた。

## 2

堀辰雄の小説「姨捨」は、「更級日記」がそうであったように直接日本文学を貫流する棄老説話とは結びつかない。平安時代の一人の女性を主人公にして、その半生を描いた小説である。

上総の守だつた父に伴なはれて、姉や継母などと一しよに東に下つてゐた少女が、京に帰つて来たのは、まだ十三の秋だつた。

右はこの小説の冒頭の部分である。ヒロインはここに出てくる十三歳になる受領の娘である。名前は描かれず「女」と表記されるのは、女性の名を明かさない当時のしきたりによるばかりではあるまい。既に分かつている他の人物の名前も、この作品では明かされない。おそらくそれは、後述するように「古い日本の女のひとり」を描いて、それと同じような境涯の多くの「古い日本の女」の典型にしようとする作者の創作意図によるものであると、私は考える。この女性の十三歳から三十三歳(?)までの半生がこの小説では描かれている。

「女」は文学少女であった。へ京へ上つたら、此世にあるだけの物語を見たいといふのは、田舎にゐる間からの少女の願だつた。少女は母にねだつては、さまざまな草子を知辺から借りて貰つたりしていた。そうして、へもつと物語が見られるやうになれば好いと思つていた。それだけに、田舎から上つて来た一人の「をば」が源氏の五十余巻を贈つてくれた時の喜びは言葉には尽くせなかつた。少女は昼も夜もそればかり読み続け、自分の境界に近い夕顔、浮舟という美しい女達の不幸せな運命の中に自分を見出していた。釋くていまはまだ容貌もよくはないが、もつとおとなになつたら、そういう女達のように容貌も上がつて、髪などもずつと長くなると夢見ていた。

しかし、「女」の身の上には物語の中のようなロマネスクな出来事

は起こらなかつた。単調な日々の中で「女」は物語を見ては夢見がちに暮らしていた。自分の運命が思ひの外にはかなく見えて来れば来る程、昔ながらの夢を頼りにしだしていた。そうしてへかうして少女らしい夢を抱いたまま、埋もれてしまふのも好いと思ひながら、物語ばかりを見ては無為な日々を送っていた。

この間「女」の身の上には、継母との別離、乳女、侍従大納言の姫君、姉の三人の死、屋形の火事、父の常陸の守への任官と帰京、彼女の宮仕えというできごとがあつた。その後で「女」は、世の中が自分の思つたようなものではないことを切実に知り始めていた。へ薫大將だの、浮舟だのが此の世にあり得よう筈がない事もわかり過ぎる位わかつて来た。が、一方、女はさういふどうにも為様のないやうな詮らめに落ち着かうとしてゐる自分が、却つて昔の自分よりもふがひなく思へてならなかつた。

その後、「女」は再出仕することになる。そんなある冬の暗い夜、殿上人らしい一人の男と出会う。時雨の降る夜であつた。男は世の中のははれな事どもを語つた後で、伊勢下向の折り、神さびた老女に昔語りを聞き琵琶まで聞いたことを話して、やがて立ち去つて行つた。その男は才名の高い右大弁の殿であつた。その男と話をした夜から、「女」の様子には変化が見られた。詞少なに、ほんやりと物などを眺めてゐるようになり、一向(ひとむき)になつて何かを堪え忍んでゐるように見えた。

あの夜以来、二人はもう一度会う機会があつた。しかし、折からやつて来た五六人の殿上人に邪魔されて、話もろくに出来ないまま別れてしまわなければならなかつた。その後「女」は前の下野の守だつた男の後妻になつた。彼女はますます一向になつて何かを堪え忍んでゐるやうな様子を見せた。その一方で「女」の表情には、おりおりへ思ひ出し笑ひのやうな寂しい笑ひが浮かんでゐるのだった。

秋の除目に夫は信濃の守に任ぜられた。「女」は自ら夫と一しよに

その任国に下ることになった。ある晩秋の日、「女」は夫に従って逢坂の山を越えた。彼女は目を赫やかせて、ときどき京の方を振り向きながら、「私の生涯はそれでも決して空しくはなかつた——」と思っていた。

「姨捨」のヒロインのたどるのは以上のような人生である。宮仕えまでの間、昔ながらの夢はいささかも変えることなく、へかういふ少女らしい夢を抱いたまま、埋もれてしまうのも好い」とさえ思つて物語の世界に耽る前半の部分。宮仕えで知る、物語と実際の世界との落差。そして、やがて迎える時雨の夜の出来事。物語の世界に比べてあまりにも貧しい体験ではある。しかしながら、その体験は「女」に一つの夢を、現実には実現しなかつた物語の世界に似た空間を与える。追憶の中でその空間に遊ぶ時、彼女の表情には寂しい笑いが浮かび、それが身の上の出来事とはなり得ない悲しみに堪える時、一向になつてそれに堪え忍んでいる。

物語に憧れ物語に耽りながら、ついに物語の世界に入ることが出来ずに、自分の宿命に従順に、物語ではない人の世を生きていくもの全てに共通する人生が、この「女」を通してここには描かれている。つまり、ここには古代の一人の女性の人生が、王朝の女性の普遍化した人生となつて展開しているのだ。

このように、「姨捨」のヒロインは運命に従順に生きてゆく。受動的な生き方を通ず。谷田昌平は「堀辰雄」(昭和58年7月20日・花曜社)で、「受動的に人生を受けとり、しかもその人生の中に「夢」の純粋さを求めつづけて、どこまでも自分の心の領域を失うまいとして生きたこの主人公の謙虚な生き方は、リルケ的な人生論を形象化したものであり、また堀辰雄の本来の人生観にも近いものだが、作者も言っている如く、この女主人公は世間的には不幸ではあるが、女としては本当に「為合せ」であつたわけだ」と言い、「死」に抗わず、その運命を、「詮めの姿態」で受け容れることによつて、そこに深い「生」

の意味を見いだそうとした『風立ちぬ』の主人公節子の「生き方の素直」さは、堀辰雄が「思慕を寄せ」ていた『更級日記』の主人公の生き方と類似している」と、その女主人公の生き方を「風立ちぬ」の節子の系列に入れていた。その系列をさらに他の女主人公にまで広げて指摘しているのは遠藤周作である。彼は「花あしび論(汎神の世界)」(注⑦)で「『風立ちぬ』の節子、『物語の女』の三村夫人、『ふるさとびと』のおえふ……こうした女性を始め『更級日記』や『かげろふの日記』の女主人公などに一貫した生の姿勢がある。彼女たちは悉く「抗ひ難い運命の前に首をたれ」(風立ちぬ)その運命的なものにさからわず、それを黙つて受けることによつて、彼女の生を運命よりも高く赫せた女たちなのであつた。こうした生の受身的な姿勢は堀辰雄の本質的な姿勢であると述べ、さらに堀が「大和路・信濃路」で描く百済観音の描写(注⑧)を引用しうえて、「この百済観音は、堀氏のあの愛すべき生の受身的な姿勢、節子や更級日記の女性や曠野の女性の純化され聖化された姿なのだ」と言つている。へ生を運命よりも高く赫せた」というのは、遠藤の指摘の通りリルケの「マルテの手記」のことばであつた。このようにリルケの文学の堀への影響を指摘するのは、遠藤の他に田口義弘がいる。彼は「堀辰雄とリルケ——「リルケ・ノート」を通して——」(注⑨)において「『更級日記』などは彼が少年の頃から愛読していたもので、その作者の姿の淋しい美しさは彼の心をいたく惹いていたが、彼女の姿が堀辰雄にとつてかけがえのないものになり、やがて彼が『姨捨』のなかにみずから彼女のその肖像を描かずにはいられなくなつたことの背後には、リルケによつて彼女の姿が新たに照明されつつ彼の内に喚起された瞬間の驚き、喜びの大きな作用があつたのではなかつただろうか」と言つている。

一方、吉田精一は「堀辰雄と王朝女流日記」(『現代文学と古典』桜楓社)で、原典と堀の小説の異同を指摘した上で「ここにはやはり受動的な姿勢で孤独に堪える日本の古い女の美しい生き方がある。この

美しさは必ずしも在来の人々の気づかなかったものではないが、それをよりの確に、立体的にうち出したのは作者の功績であるといわねばならぬ。もつとも「更級日記」の原典そのものが「かげろふ」にくらべて単純な一本の線で構成されているために、「嫉捨」の女人像も、原典のそれと、さしてへだたりのないものになっている」と述べている。吉田の論は、小説の女主人公に投影された堀の王朝女流日記受容のありかたを述べたものであった。

## 3

「更級日記」を小説化するに際して、堀が意図的に原典を改変した所が二か所ある。(他の些細な変更については、ここでは触れないことにしたい。)その一つは「五」の後半の部分で、それまで一貫してきた女側からの視点を変えて、男の右大弁の側から書いていることである(注⑩)。こうすることによって、作者は右大弁も女に好意を寄せていたことを読者に明かす。もう一つは、最後の「六」の場面で信濃の守に任じられて信濃に下る夫と共に、女をも信濃の国に赴かせたことである。この点について、釈道空はその女をへもつと幸福にしてやりたかつたのだ(注⑪)と言い、吉村貞司は「堀辰雄はあまりにも物語めいた、はかない恋が、いぢらしくたまらないやうである」そのために右大弁の心理の中に入って行く。右大弁は作者なのだ。へ幼いときから、魂の中で育てた永遠の恋人に、はじめて恋心をうちあける堀辰雄だ(注⑫)と説くのである。これらの説を踏まえながら、そのことに言及しているのは大森郁之助である。彼はこの改変について、へ女主人公の身の上は、

○相手からの愛が強化・深化されたのだから、第三者の目から見れば、より幸せに――

○相手の愛を知り難くされたのだから、女の主観としては、より不幸に――

改めたということになるのか」と言い、そこに「幸福」観、「救済」観を読み取ることに反論する。そして、「堀自らの人生観においても、「救い」は現実生活としては有り得ず、現実を「詮め」た者の対象である「夢」(幻影)としてしか存在しない――少なくとも期待はし得ない――という「詮め」が徐々に固まりつつあつたのではないか(注⑬)とするのである。

それでは、作者である堀自身の意図は実際にはどうだったのであるか。その点を彼のエッセエ「更級日記」の中に探つて見よう。彼は次のように原典の内容について書く。「光る源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは」と漸つとの事で知つた後、彼女はそのときはじめて「人がらもいとすくよかに世のつねならぬ人」に見えた奥ゆかしい同じ年頃の男に出会ふ。それは冬のくらい、しぐれ模様の夜であつた。へそのしぐれの夜の対話はこの二人の中年の男女の心に沁み、互いに相手を淡い気もちでなつかしみあふが、その後、二人がゆつくり語り合える機会はもう二度とはなかった。ただ二度ほど殿中でそれとなく認め合う折もあつたが、どちらも折悪しく、僅かに口頭で歌をとりにかわすだけで別れる。へが、その逢へさうで逢へずにしまつた利那ほど、彼女は自分がそつくりそのまま物語のなかの女でもあるかのやうな気もちを切実に味つたことはないのだ。さういふ気もちにさせられただけで、そのやうな一瞬間の心と心との触れ合ひを感じ得られただけで、既に物語そのもののこの世には有り得ないことを知つてゐる彼女は、いかにも切ないが、一方、その心の奥で一種の云ひ知れぬ満足を感じる。堀はこう書いてきて、それを振り返つて以下のように反省する。へいま私がここにその経過を語つて来たところのものは、半ば私の書いた短篇小説のそれであつて、「更級日記」の原文からはやや離れて来たものになつて来てゐるらしい事は私も認めないでは

られない」と。

右の文章で見る限り、堀は時雨の夜の右大弁との出会いを、女は「自分がそつくりそのまま物語のなかの女でもあるかのやうな気もちを切実に味つた」唯一の経験と見做し、「そのやうな瞬間の心と心との触れ合ひを感じ得られただけで、その心の奥で一種の云ひ知れぬ満足を感じる」と説明している。これを、小説の「五」の右大弁の次のやうな心理描写と照応させて見る時、この右大弁の側から書かれた部分は、やはり、女の「満足」を補完するものであったと見ていいのではあるまいか。

(略) その時雨の夜のやうに、何ぶん暗かつたのでその女の様子なんぞよく見られなかつたせゐもあるかも知れないが、その女といかにもさりげなく話を交してゐただけで、何かかう物語めいた気分の中に引き摩られて行くやうな、胸のしめつけられる程の好い心もちがなかつた。(略) もう一度で好いから、あの女と二人ぎりでしめやかな物語がしてみたい。(略) —— 此頃になくそんな若々しい事まで男は思つたりもしてゐた。

右に見る通り、右大弁もまた「何かかう物語めいた気分の中に引き摩られて行くやうな、胸のしめつけられる程の好い心もち」がしていた、と堀は書かずにはいられなかつたのである。

ただ、女の半生を書いた小説ではあるが、このやうな短い小説の場合、ここに突如観点の統一を欠く部分が挿入されるのは如何なものか。私としてはこのやうな観点の不統一は、この作品の欠点になつてしまつたと考へている。と同時にまた、女が「前の下野の守だつた、二十も年上の男の後妻になつた」時期を、右大弁との出会いがあつた後のことに改変してしまつたので、大森説の成立する根拠を作つてしまつたことも否めない事実である。

私は先に堀の小説「姨捨」は「古い日本の女のひとり」を描いて、それと同じやうな境遇の多くの「古い日本の女」の典型を造形しようとする、作者の創作意図によつて書かれた作品であろう、と述べた。(その作者の創作意図は、あるいは、保田與重郎の「更級日記」のエッセエに刺激されて持つたものではなかつたかとも思うのだが)、ここでは小説の題名と関連させながら、そのことについて検討を加えて見たい。

堀は「更級日記」を小説化するにあたつて、三つの操作をしている。その一つは題名を「姨捨」とすること、二つめは『古今和歌集』の「わが心なくさめかねつ」の歌を題詞に使うこと、そして最後は、結末を変えること。このことについては、彼の「更級日記」に次のやうに述べられている。

女を信濃へ赴かせたのは、「信濃への少年の日からの愛着」とも一つ、「私が自分の作品の題詞とした、古今集中の

わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

といふ読み人しらずの歌への関心」であつた。  
 「この古歌は、私には、どうしても自分の作品の女主人公とほぼ似たやうな境遇にあつた女が、それよりもずっと遠い昔に人知れず詠んだもののやうな気がしてならない。(略) さういふ境遇の女が自分の宿命的な悲しみをいだいた儘いつかそれすら忘れ去つたやうに見えてゐるが、或月の好い夜にそれをゆくりなくも思ひ出し、どうしやうもないやうな気もちにさせられてゐる時におのづから詠み出したものとして、それを考へて、一番私の心にそのなつかしさの覚えられる歌である。(略) 私は彼女自身の詠んだその歌よりも、この古歌そのものをこそ彼女に口ずさませたいやうな気がしてならなかつたのである。」

——それ故、私は自分の作品に特に「姨捨」といふ題を選び、その作

品の中では女主人公をして夫に伴つて信濃に赴かしめるところで筆を断ち、その代りにただ、その後の女の境涯をそれとなく暗示するかのやうに、その読み人しらずの古歌を題詞として置いておいたのである。

菅原孝標の女は「更級日記」のおしまいの方で、女主人公に、

月もいでてやみにくれたる姨捨になにとて今宵たづねきつらむ

という歌を詠ませている。この歌よりもへわが心なぐさめかねつさらしなや……という古歌を主人公に口ずさませたかった、という作者の心がここには述べられている。そしてそれが、この作品の題名を「姨捨」と名づけ、その古歌を題詞として添えた理由だといふのである。作者がへこの古歌は、私には、どうしても自分の作品の女主人公とほぼ似たやうな境遇にあつた女が、それよりもずっと遠い昔に人知れず詠んだもののやうな気がしてならない」と言う時、私はそこに、この女主人公を王朝時代の「古い日本の女の姿」として典型化しようとする作者の意図を読み取らずにはいられない。釈道空は既にそれを読み取り、「少年の日から愛着した信濃の土地——それへ来ないで、その山国に暮らす夫を待つてゐる都女としてばかり、作者を手放して置くことの出来なくなつた堀君は、古い魂の因縁を説いてゐるのである」と言い、「更級の女は其未生以前、既に一たび世に現れて、「わが心なぐさめかねつ。更級や 姨捨山に照る月を見て」あの古歌を詠んで過ぎた、過去の人でもあつた気を起させられる」（注⑭）と述べている。

堀は同じエッセエの中で、さらに、菅原孝標の女の文章が「更級日記」と題された理由を、以下のように述べる。

（略）月の凄いいほどいい、荒涼とした古い信濃の里が、当時の京の女たちには彼女たちの花やかに見えるその日暮らしのすぐ裏側にある生の真相の象徴として考へられてゐたに違ひなく、そしてさういふ女たちの一人がその心慰まぬ晩年に筆をとつた一生の

回想録はまさにそれに因んだ表題こそふさはしいのだ。

へ月の凄いいほどいい、荒涼とした古い信濃」を、当時の京の女たちの「花やかに見えるその日暮らしのすぐ裏側にある生の真相の象徴」と見る作者は、これまでに述べてきたやうに、あの古歌にそれを重ねて小説の題詞とするのである。この題詞のイメージが、主人公のへ思ひの外にはかなく見えて来る運命や、へ世間見ずの女には思ひの外につらい事ばかりだつた宮仕え、あるいはへ一向になつて何かを堪え忍んでゐる様子」とひびきあう時、その女主人公の「生」の姿が、個人を越えた王朝時代の「古い日本の女の姿」となつて浮かび上がつて来る。ここに堀の小説「姨捨」の特色があつたのである。つまり、彼はこの女主人公を近代的な女性像として蘇らせようとしたのではなかつた。むしろ釈道空の小説『死者の書』のやうに、日本の王朝時代の文学空間に、そのまま「古い日本の女の姿」の典型として置いて置いたのである。

堀はそのエッセエに、さらに書く。

そして彼女の回想録を読み了らうとする瞬間に誰しもの胸裡におのづから浮かんで来るであらう信濃の更級の里あたりの侘しい風物、——さういふ読後の印象を一層深くするやうな結末を自分の短篇小説にも与へたいと思つた。

そこに私がこの「更級日記」を自分のものとして書き変へるための唯一のよりどころがあつたと云つてもいい。

そのために、これまでに述べてきたやうな工夫がなされたのだ、というのだ。その結果、私はそこに以上のような特色を読むことになつたのである。

それではこの小説を、最初に提起しておいたやうに、日本文学を縦に流れる「姨捨」の系譜という観点から検討したならばどういふことになるのであろう。

堀はエッセエ「更級日記」の最後の方で、姨捨の伝説やその文学へ

の投影について言及した上で、へ——しかし、いまのところ私はそれらの諸説にはこだはずに、自分の前にある古歌をただそれだけのものとして単純に味ひたい。——或はこの読み人しらずの歌は、その更級の里にあつて近親を失つたものがそれを山に葬つた後、或夜その山に照る月をながめながら詠んだ哀傷の歌として味ふのが本筋かも知れないが、いまはその考へをさへ棄てて、私はそれをただ女主人公のやうな境遇の女がその里に住みながらふと詠みいでた述懐の歌としてのみ味ひたいのである」と、その古歌の解を示している。従つて、私も小説「姨捨」をではなく、その初めには「姨捨記」と題されて発表されたエッセエ「更級日記」をこそ、「姨捨」の系譜の中に数えなければならぬのかも知れない。なぜならば、小説「姨捨」は作者も言うように、『大和物語』などの姨捨説話とは直接繋がらないのだから。しかしながら、これまでに検討を加えてきたように、作者の意図によつてこの作品に「姨捨」という題名がつけられ、あの「わが心」の古歌を題詞に置かれた時点で、へ古い因縁を説いてゐるのである。(略)更級の女は其末生以前、既に一たび世に現れて、(略)あの古歌を詠んで過ぎた、過去の人もあつた気を起させられる。(釈迢空)と読まれる可能性を持つ時、この小説の女主人公は「古今和歌集」の読み人しらずや、山に捨てられてこの古歌を詠んだという『俊頼口伝』の老女、あるいは、謡曲の「姨捨」の老女の系列に自然に連なつて行くのである。つまり、作者によつてこの小説はどのように読まれる運命を与えられてしまつたのである。いや、そればかりではない。へ夫がその秋の除目に信濃の守に任せられると、女は自ら夫と一しよにその任国に下ることなつた」と、作者がその原典を大きく変えた時、その女主人公は自分の意思であの姨捨山へ、姨捨山のある信濃へ向かうことになる。この点において、この小説のヒロインは、井上靖「姨捨」の母、深沢七郎「楢山節考」のおりんの先蹤をなす人物と言えるかも知れない。

さて、この小説のへ近江、美濃を過ぎて、幾日かの後には、信濃の守の一行はだんだん木深い信濃路へはひつて往つた」という結末の一行は、小説の題名と照応しあつて、「女」の姨捨山行きを暗示するかのようである。あるいは、ここまで読むのは行き過ぎかも知れないが、しかし私には、姨捨山に捨てられた老女が「わが心」の古歌を読んだように、「女」は自らの意志で信濃へ行き、姨捨山のイメージの中で、「更級日記」の「女」のようにその半生を文芸化するように思われて仕方がないのである。こうして「姨捨」の女主人公は、作者堀と重なり合つてゆくのである。

一見、姨捨の系譜とは無縁に思われた堀の小説「姨捨」は、このように、作者の行つた三つの操作によつて、逆に、姨捨の系譜に組み込まれることになつたのである。

#### 《注》

注① 『国文学』第八巻第九号(昭和三八年七月・学灯社)掲載の「堀辰雄と折口信夫―私記風に見た堀辰雄の一面―」による。

注② この小説は昭和十四年一・二・三月号の『日本評論』に掲載された。

注③ 「昭和十年代の堀辰雄―日本的なるもの―への接近姿勢をめぐつて―」(『日本文学研究資料叢書「堀辰雄」』(昭和六二年四月・有精堂)によつた。なおこの論文の初出は、昭和四〇年三月発行の北海道高校教育研究会『紀要』第二号。昭和四六年三月に補筆したもの。

注④ このエッセエは当初「姨捨記」と題されていた。

注⑤ この本文は『保田與重郎全集』第五巻(昭和六一年三月・講談社)によつた。

注⑥ なお、同論文によると堀辰雄の蔵書にはこれ以外に次のような更級日記関係のものがあったという。

『更級日記』佐々木信綱編・昭和五・五版。

『更級日記新註』玉井幸助・昭和11。

注⑦ ここでは『堀辰雄全集10堀辰雄案内』（昭和四〇年二月・角川書店）所収の本文によったが、これは遠藤周作『堀辰雄』（一九五五年一月・古堂書店）、『宗教と文学』（遠藤周作文庫・一九七七年三月・講談社）にも収められている。

注⑧ 堀辰雄の百済観音の描写は以下の通りである。

へともかくも、流離といふものを彼女たちの哀しい運命としなければならなかつた、古代の気だかくも美しい彼女たちのやうに、此の像も、その女身の美しさのゆゑに、国から国へ、寺から寺へとさすらはれたかと想像すると、この像のまだうら若い少女のやうな魅力もその底に一種の犯し難い品を帯びてくる。

注⑨ 『堀辰雄全集10堀辰雄案内』（昭和四〇年二月・角川書店）所収。

注⑩ 実はもう一か所「二」にも視点を「女」の側から「女の父」の側に変えた所が出て来る。この変更も、短篇小説の完成度という観点から見た場合、好ましいものとは言えない。ただ、この小説の内容が「女」の半生を描くという長編のそれなので、短篇小説としての見方を強要してはいけないのかも知れない。

注⑪ 釈道空「かげろふの日記・曠野」（『堀辰雄全集10堀辰雄案内』（昭和四〇年二月・角川書店）所収）による。この論は角川文庫『かげろふの日記・曠野』（昭和二六年七月）の解説として書かれたものである。

注⑫ 吉村貞司『堀辰雄―魂の遍歴として―』（昭和三〇年七月・東京ライフ社）の「娼捨」による。

注⑬ 大森郁之助『堀辰雄の世界』（昭和四七年一月・桜楓社）の「娼捨」での救拔による。なお、この論における「救い」説の否定はさておき、彼の「詮め」説は、私にとっては納得できるものであった。

注⑭ 注⑪と同じ論による。